

詩の遠景近景



城戸 朱理
(詩人)

11月

過酷な現実、異化する寓話

太陽は十一年周期で、活動が盛んになったり低調になったりするが、通常は活動のピークとなる年に、太陽の北極と南極の磁場が入れ替わる。これを「極域磁場転換」と呼ぶが、今年、本来ならば起こってしかるべきその転換が、いまだに起こっておらず、太陽が活動の低調期に入り、地球も寒冷化するだろうと指摘する専門家もいる。

理由は分からないが、異常気象が続いているのは事実だ。今年の酷暑、強大化する台風。フィリピンを直撃した超大型台風三十号「ハイエン」の被害も、死者五千人超と信じがたいものだった。

東日本大震災以来、異常な自然現象が相次いでいるが、日本に暮らす以上、地震も台風も避けられない。しかし、そこで絶望を深めていくのではなく、すべてが変化して止まないと観念することで、歴史的に日本人は、逆に生きる力を汲み上げてきたのではないだろうか。

「満ち足りて、女も眠りにおちる。女の一生のある日は、そうして終わる。本当は何だったろう、あれは。夕べの天の瑞兆のようなものを、女は、もう憶えていない。／つまり、この世のことは、一切が、やがて、何ものかの遠い夢になって終わるということなのである。」

これに對して、三角みづ紀の『隣人のいない部屋』は、逆に痛みを伴うような現実と向かい合う。「ここはわたしの部屋じゃない／一瞬だけ晴れて鳥が散って／舞ってすべて見覚えのある路地／通過する港をすきになつてはいけない／一夜だけなんてしりたくないし／変わらないことをうつくしくおもう／ここは世界中の迷子がたちよるという／みんなそろってうれしそくに／迷子になるという」

撮影したスロヴェニア、イタリア、ドイツの写真が詩篇の合間に挟まれていく。つまり、母国語が通じない海外での滞在の感覚のなかで書かれた作品を集成するものであり、ひりつくような孤独感、そして、存在の痛みのようなものが表現されていると言つてよい。

「あなたはたしかに／ひどいことを言った／すんとして／毛糸の帽子を深くかぶりなおす／日がさして／逃げ水がいざなうて／車をとめてくださ／い／いまから号泣するか」

鮮烈な詩行が、あらわにするもの。それは、人間の痛覚そのものなのではないだろうか。

新井高子の『ベットと織機』もまた、異貌の詩集だ。

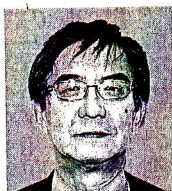
「赤んぼうが、仏ンぼうが、大海原に浮かぼうが、叫ぼうが、／原子炉建屋がぶっ飛ばうが、／堤防が、陰謀が、官房が、／アンビリバボーが、／インクレディボーが、／東電が、／ユニクロ着込んで／防御する、／津波／コンドームで／発電する、／半減期／で／いいのか？／わたしたち」

作品は寓話的だが、あちこちの亀裂から現実が顔を出す。言葉遊びも織り込まれ、軽やかかと思ふとシリアスで、シリアスかと思ふと笑いが侵入してくる。

この異様に大きな言語的振幅が、そのまま現代という時代のメタファー(暗喩)になっているのではないだろうか。

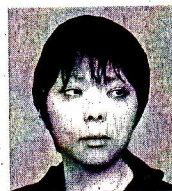
危機的な時代の詩。それは、生き抜く力の比喩でもあるのだろうか。

- 粕谷栄市『瑞兆』(思潮社)
- 三角みづ紀『隣人のいない部屋』(同)
- 新井高子『ベットと織機』(未知谷)



粕谷栄市

粕谷栄市『瑞兆』は、



三角みづ紀

現実と夢が侵犯し合うように展開する詩篇は、いずれも諦念にも似たトーンをたたえている。しかし、それは作者ならではの無常観の現れであり、むしろ過酷な現実さ

え異化していく詩の力の現れなのかも知れない。「何ものかの遠い夢」として終わる地上のいつさいの出来事。その夢を生き抜くかのような詩集である。

それに対して、三角みづ紀の『隣人のいない部屋』は、逆に痛みを伴うような現実と向かい合う。「ここはわたしの部屋じゃない／一瞬だけ晴れて鳥が散って／舞ってすべて見覚えのある路地／通過する港をすきになつてはいけない／一夜だけなんてしりたくないし／変わらないことをうつくしくおもう／ここは世界中の迷子がたちよるという／みんなそろってうれしそくに／迷子になるという」

この詩集は作者自身が撮影したスロヴェニア、イタリア、ドイツの写真が詩篇の合間に挟まれていく。つまり、母国語が通じない海外での滞在の感覚のなかで書かれた作品を集成するものであり、ひりつくような孤独感、そして、存在の痛みのようなものが表現されていると言つてよい。

「あなたはたしかに／ひどいことを言った／すんとして／毛糸の帽子を深くかぶりなおす／日がさして／逃げ水がいざなうて／車をとめてくださ／い／いまから号泣するか」

鮮烈な詩行が、あらわにするもの。それは、人間の痛覚そのものなのではないだろうか。

新井高子の『ベットと織機』もまた、異貌の詩集だ。

「赤んぼうが、仏ンぼうが、大海原に浮かぼうが、叫ぼうが、／原子炉建屋がぶっ飛ばうが、／堤防が、陰謀が、官房が、／アンビリバボーが、／インクレディボーが、／東電が、／ユニクロ着込んで／防御する、／津波／コンドームで／発電する、／半減期／で／いいのか？／わたしたち」

作品は寓話的だが、あちこちの亀裂から現実が顔を出す。言葉遊びも織り込まれ、軽やかかと思ふとシリアスで、シリアスかと思ふと笑いが侵入してくる。

この異様に大きな言語的振幅が、そのまま現代という時代のメタファー(暗喩)になっているのではないだろうか。

危機的な時代の詩。それは、生き抜く力の比喩でもあるのだろうか。

住宅街になじむ小宇宙

せ

小説想像ラジオについて語るという
せいこうさん＝仙台市の東北学院大で

清時代の書—碑学派—

野趣あふれる力強さ

書の世

今年には鄧石如の1805年0年。人生涯いた。その業一代のみならずの巨星／(国書道文化辞知る絶好の「清時代の書(12月1日ま博物館と台東館は、鄧石如吳熙載を経て昌碩へと連な書の流れを概「碑学派」臨前夜の部分をの受容を書きしている。

鄧石如「六屏」写真堂々とした筆満点。没す彼の「書」の品(東博)富田淳さん弟子である子玉座石銘同の篆書でハイカラ如の篆書と

南